

日本文化部会Ⅱ

【概要】

清水真裕*

日本文化部会Ⅱは、2014年12月16日の午前9時から午後12時まで、お茶の水女子大学文教育学部1号館1階大会議室で行われた。

本部会では、大学教員2名と大学院生3名による以下の研究発表が行われた。

- ① 「グローバリゼーションと日本独自の哲学研究の意義—大森荘蔵の事例から—」。石田恵理（お茶の水女子大学大学院生）
- ② 「文化的テラスのシンボリズム」ライヒ・ダーヴィド（リュブリャナ大学院生）
- ③ 「中国狐文化の受容から見る日本人の女性観」潘蕾（北京外国語大学助教授）
- ④ 「Tokō Ishoku and the reform of the Act on Organ Transplants in a Medical Anthropological Perspective」アレッシア・コスタ（ロンドン大学SOAS院生）
- ⑤ 「国境なしシンドローム？医療人類学における『文化』による説明の限界を巡って」ファビオ・ギギ（ロンドン大学SOAS講師）

当会では、様々な国籍の研究者から、多様な分野・内容の発表がなされ、参加者は大いに視野を広げることができた。「グローバル化と日本学」という今回のコンソーシアムのテーマにふさわしく、我々を取り巻く地域と時代を超えた文化的現象が広く考察されることによって、グローバルな視点からなされる日本学研究の深化の可能性を強く認識することができた。

以下、各々の発表の概略を述べていく。

石田恵理さんは、“その国独自の研究の意義”を疑問視しうるグローバリゼーションの進展という問題意識に対し、西洋哲学研究の歴史の中で独自の境地を切り開いた大森荘蔵の思想を紹介された。大森荘蔵の「ことだま論」においては、言葉の普遍的な「意味」の存在は否定され、“一つの言語の獲得”とは、あらゆる状況や発語に対して、どのような動作がなされるべきかを理解していることだとされる。また、人が何かを「思い浮かべて」いるとき、それが直接知覚できる場合でも、離れたものを「思う」場合でも、双方は同じ「立ち現れ」であるとされる。こうした考察は、“事物を直接喚びおこす”力を持つと信じられた「ことだま」観によって支えられているといえる。このように、我々の思考の上で言語が果たしている役割が明らかとなり、思考と言語の分離の不可能性が指摘できる。よって、ある国独自の哲学研究の意義はグローバリゼーションの進展によっても失われることはないのである。

なお、質疑応答においては、あらためて大森荘蔵の思想の独自性とは何かが問題となったが、西洋思想とともに「ことだま」という観念から影響を受けているところに、彼のその思想の独自性が位置づけられるとされた。

ダーヴィド・ライヒさんは、グローバル経済社会への移行によって変容する文化的景観のうち、「文化的テラス」（傾斜のある土地に人工的に作られた平坦な農業地域）を取り上げ、スロベニアと日本の文化的テラスの在り方を比較分析された。両者は、形態、歴史性、生産物が異な

*お茶の水女子大学大学院院生

るほか、その維持のされ方にも違いがある。スロベニアの文化的テラスは自然のままに、または文化公園に指定されることで保たれているケースが多いが、日本の「棚田」の保全には、近年、NPO団体の活動やオーナーシステムの利用が見られる。農耕の放棄や過疎化が文化的テラスの保全を難しくしているが、その文化遺産的価値や生態系の多様性の評価から、保存のための努力が高まりつつある。後世への継承には、保護のための活動や人間同士のつながりが不可欠となる。

発表後の質疑では、「棚田」そのものの生産性や、地元の人々のニーズ、保全の方法等が問題となり、その点に注目した今後の研究への期待が語られた。

潘蕾先生は、中日両国の様々な文芸に登場する「狐」の在り方が、それぞれの国の文化的理解に役に立つとの視点から、中国・日本の狐文化の変遷と受容について、詳細に検討された。中国の狐文化には、主として①部族のトーテム、②瑞祥の動物、③人に化ける狐妖、④狐神、⑤狐仙の5つのタイプが見られる。特に③の人に化ける狐のうち「女性に化ける狐」、「阿紫タイプ」（禍をもたらす蠱惑的な狐）と「任氏タイプ」（貞節を守る良妻となる狐）の発展には、中国の女性観、すなわち、女性が政治から排除され、家庭内における妻・母としての役割が強調されていく歴史が反映されていると考えられる。一方、中国との交流によって日本へ流入した狐文化の中でもっとも定着したのは、瑞祥としての狐や、稲荷といった「狐神」のタイプであるといえる。また、悪女タイプ・良妻タイプの「狐妖」の広まりと定着は、室町時代以降であって、特に江戸時代に大成することとなる男尊女卑の考え方に関係していると指摘できる。このように、中国の場合と同様、日本における狐文化の発展からも、女性観の変化の一端を明らかにすることができるのである。

アレッシア・コスタさんは、医療人類学の視点から渡航移植と臓器移植の問題について発表された。日本における「脳死問題」は、医療分野の専

門家の間のみでなく、社会一般の中で広く議論されている点が特徴的であり、欧米諸国と異なる。脳死の問題は、人間の生理的な死のみでなく、社会的・歴史的な身体観に深く関わるものである。日本は、臓器移植に関してグローバルな在り方からは遠く、「渡航移植」といった現象が発生している。日本の臓器移植問題は、グローバルな視点で論じられるべきであり、日本で起こっている問題は、今日の生命倫理学が解決すべき課題と直接関わるものである。また、発表の後半には、6歳の小児の「渡航移植」に関するフィールドワークがレポートされた。コストのかかる渡航移植のため、両親は声をあげて募金を集め、多くの人々からサポートを受けることとなった。この事実から、臓器移植という行為やその患者の命の問題は、社会全体で共有される可能性があると考えられた。

発表後の質疑応答では、「日本では臓器移植に対する抵抗観が強いと思われるが、それはなぜだろうか」という質問に対して、「脳死を本当の死と捉えることが難しく、臓器を取り除くことによって命を断つことは、やはり周囲の人間にとって受け入れがたいことなのではないか」と回答された。

ファビオ・ギギ先生は、人とモノとの関係を探るというご自身の研究テーマに沿い、いわゆる「片付けられない現象」について、フィールドワークの成果を交えて報告された。「片付けられない現象」とは決して日本独自の現象ではなく、例えば「アニミズム」といった文化的な要素に還元して説明されるのみでは不十分である。我々は、生きている世界の中で起こる新しい現象・不思議な現象を、すでに確立しているカテゴリーやナラティブで理解しようとする傾向がある。例えば、「片付けられない現象」の場合、人の行動を中心としたもの、場を中心としたもの、ジェンダーを中心としたものなど、国や学問分野によって様々な名づけと説明が見られる。シンдрームは、文化・自然といった、何らかの変わらない本質から

発生するというよりも、時間や空間によってその意味付けが変わるもの、すなわち「渡りシンドローム」ともいうべきものである。そうした視角から現在の「片付けられないシンドローム」の根本を捉えると、消費社会の影響、また、「モノの正しい持ち方」という規範的な考え方の存在が見出しうる。

発表後には、会場から、日本人はこのような現象に対し、善意に解釈する傾向があるように思うという指摘があった。また、モノがそれほどない砂漠のような環境でも、同様の現象が見られるのかといった質問もなされた。これらの見解や疑問に対し、発表者は、ある現象に対する周りの見方や反応は、その環境そのものによって大きく左右されるのだろうと回答された。